

書くことの指導と評価

京都女子大学附属小学校校長 吉永 幸司よしなが こうし

一 書く力を育てる観点で評価する

遠足前日、三年生の男の子が次の日記を書いてきた。

明日は、いよいよ遠足だ。けれど、空からはきつい雨が降っている。ぼくは、テルテルぼうずを作った。テルテルぼうずの中に、「どうか明日は晴れますように。」と書いた紙を入れておいた。

ぼくは、九州でもケーブルカーに乗ったことがある。比叡山とどっちがこわいかな。ロープが切れたらいつしゅんのうちに谷に落ちてしまうだろう。お母さんから「ぜったいだいじょうぶよ。」と言われたので安心した。明日は、ぜったい晴れますように神さまどうかおねがいします。

この日記に次のような評語を添えた。

○テルテルぼうずが、願いを聞いてくれてよかったね。
○楽しい遠足になりましたか。お母さんの言葉で安心してケーブルカーに乗れてよかったね。

話題に対する読み手の気持ちに共感するような意味で評語にしたのであるが、これでは十分でないと思った。そして、書く力を身につけさせることを意識して次のことを付け加えた。

○テルテルぼうずを作っているときの気持ちをくわしく書くといいね。

だが、この評語では子どもが次も書くという気持ちになると思えない。

一般的に書くことについては、「よく書きました。」「もう少しくわしく書きましょう。」「というような指導が日常的である。前述の評語もそのたぐいのように思えた。

先生の手紙には、初めのあいさつに「教室の今」を書かせた。

○一年生の交通教室が運動場で開かれています。

○けいじ板にはっている絵が、今日は元気がありません。
このような初めのあいさつを紹介し合ったあとに、自分の気持ちを伝える、本文を書く」という指導へ広がっていった。

「おはようございます。」とむかえてくださる先生がこれられない朝の教室でした。校長先生が、先生は急に病気になるれてこれれないと教えてくださいました。

先生が病気と知ってとても心配しています。今日は、代わりの先生が来てくださるので安心してください。

以上の事例を、書くことの指導と評価の観点で次のようにまとめることができる。

「よくできました。」「がんばりました。」「から、どのように書くことが大事であるかという観点で評価をする。話題や事柄と表現形式や技術の両面を軸にした評価項目が、力を育てる授業をつくるうえで大切である。

「書きたいことは何か」「工夫して書いたのはどの文章か」という、書く力に響くような指導を積み上げることが大切である。そうでなければ、「どこがよかったのか」「どこを直せばよい文になるか」などを知りたいという気持ちや期待にこたえることはできないからである。

二 話題・技術の両面から評価項目を設ける

「手紙文」の指導をしたことがある。三年生の担任から急病で休むという報告を受け、急に授業を引き受けたのである。

「手紙文を書くときの決まりを理解し、先生にお見舞いの気持ちを伝える手紙文を書く」という目標を設定した。授業の初めに、「手紙を書くときの決まり」として、初めのあいさつ 本文 終わりのあいさつ 後付け等を指導したあと、先生への手紙を書かせた。

担任の先生に書くという親近感もあつてか、子どもたちは書くことに抵抗はなかった。ところが、「先生、お元気ですか。ぼくも元気です。」「という書きだしで始める子がいて慌てた。この子が、「手紙の決まりを生かして書く」という目標を理解できていないことを確かめたうえで、「先生は病気で休みなので、元気ですか、という書きだしはおかしい。」「と指摘した。そして、手紙を書くことの目標と課題をていねいに指導し直した。